故　村山研一教授と地域

信州大学人文学部　増山憲一郎

私が村山先生と出会ってから、まだ僅か数年しか経っていないのですが、近くでお仕事をさせていただき、大変多くのことをご教示いただきました。この場をお借りして感謝の気持ちをお伝えするとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

平成25年５月26日、それはあまりにも突然にやってきました。私の直属の上司であった信州大学人文学部の村山研一教授が急逝されたのです。先生が倒れられるつい１週間前には、一緒に栄村の秋山郷に出張に出かけていました。もうこの先、先生とご一緒に地域に入ることができないのだと思うと、何ともさみしい気持ちになります。

私は平成20年８月、信州大学における地域とのパイプ役として、産学官連携推進本部所属の地域ブランド分野を担当するコーディネータとして着任しました。翌年、村山先生が地域ブランド分野の分野長に就かれてからというもの、頻繁にお仕事をご一緒にさせていただくことになりました。もちろん、それまでも人文学部が事務局となって実施していた、この地域ブランド研究会などを通じてご一緒する機会はありましたが、村山先生が分野長になられるまで、ほとんど直接お話をしたことはありませんでした。今だから申し上げるのですが、それまで私が村山先生に抱いていた印象は「仏頂面で、人の話など全く聞いてくれそうにないカタブツ教授」というものでした。ここだけの話、その姿は父親を連想させ、実は少し苦手意識さえ抱いていたくらいでした。しかし、村山先生が直属の上司となり、一緒にお仕事をさせていただくようになって、先生に対する自分の印象が全く間違っていたことにすぐに気づいたのでした。実際の村山先生は、どんな人の話にもよく耳を傾け、しかも表面的に聞き流すのではなく、言葉の奥に潜む微妙なニュアンスまでをしっかりとくみ取って下さる方でした。また、話の全体を正確に理解し、その都度、的確なアドバイスやたくさんのご意見をいただきました。結局、あまりにも急なお別れだったため、直接お伝えすることができませんでしたが、これまでの村山先生のご指導には、本当に感謝しています。

平成25年度からは、村山先生が研究代表者となって前年よりスタートしていた「イノベーション政策に資する公共財としての水資源保全とエネルギー利用に関する研究」プロジェクトの研究員として研究に携わらせていただいたので、先にも書いた通り、この数年は村山先生と一緒に出張に出かけたり、フィールド調査のために地域に入ったりと、以前にも増してご一緒させていただく機会が多くなっていました。晩年、行動を共にさせていただいた中で、とても印象に残っているのは、地域に対する先生の情熱と、その地域に関する知識の豊富さでした。たとえば、フィールド調査に入る集落の地形やその成り立ち、地域の基幹産業、特産品や過去に地域を売り出した際のキャッチフレーズにいたるまで、調査に入る際に徹底的に調べ上げたありとあらゆる情報が、まるで百科事典のよう

にインプットされていました。ひと度、知識の扉を開くと、まるで百科事典と会話をしているように、どんなことでもすらすらと出てくるのでした。その情報量には、時に同行した他学部の先生方も目を丸くして驚くほどでした。しかも、その情報は村山節とも言える“あの独特の口調”で話され、実に嬉しそうに説明してくださるのでした。

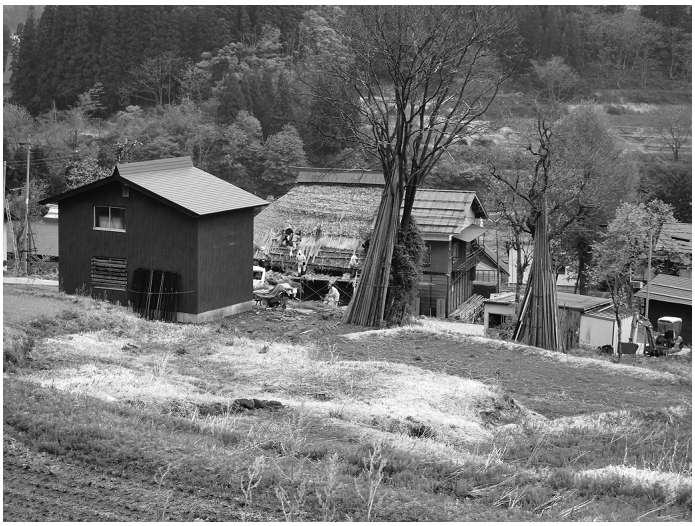
村山先生の地域に対する情熱と好奇心を物語る２つのエピソードをご紹介します。

一つ目は、村山先生の好奇心によって、普段は滅多にお目にかかれないような光景に遭遇したという話です。

調査に出かけた際、予定よりもだいぶ早く現地に到着してしまった先生と私は、村山先生がまだ行ったことのないという地域に向かおうと、適当な横道を進むことにしました。すると、しっかりと道を確認せずに横道に入ったおかげで、車が通り抜けできない小路に入ってしまい、やむなく来た道を引き返すことになりました。入って来た際には気がつかなかったのですが、田んぼの向こうの小さな集落で、数人が集まって古い民家の茅葺きの屋根を葺き替えていることに気が付いたのでした。これは珍しい光景に出くわしたと、田んぼの間の道に車を乗り捨て、少し興奮気味に二人でその光景を写真に収めたことがありました。

イベント的に行われるお祭りのような作業とは違い、集落における普段の営みを感じることのできた貴重な体験でした。

その時私は、まだ行ったことのない地域を訪ねたいという村山先生の情熱が、その光景に出会わせてくれたのだと強く感じたのでした。



集落で出会った茅葺屋根の葺き替え作業の光景

二つ目は、村山先生がこれまで関わられた地域に、再び調査研究として入ることになった際のお話です。

その村は、村山先生が長年に渡って外部委員を務めるなど、関係してきた村だったのですが、これまで一度も通ったことのない道があると言って、調査の際に２万５千分の１サイズの大きな地図を持参して、帰りのルートとしてその道を通って帰ることを提案されたのでした。その日の調査を一通り終えた私たちは、村山先生から提案のあったそのルートで帰路に着こうと、携帯電話の電波も届かないような山道を車で走っていました。村山先生は、助手席に深々と座り、Ａ０版の特大サイズの地図を広げて、ナビ画面と照合しながらルートを確認していました。デジタル時代のいまどき、その大きな地図ですか？と思わず突っ込みを入れたくなってしまうのですが、それが村山スタイルなのでありました。結局、夏の間しか通ることのできないそのルートは、目的の道に出る

集落の方の理解を得るため、調査研究の内容を住人に説明する村山先生

直前で土砂崩落と残雪によって車は通り抜けることができずに、やむなく来た道を引き返すことになりました。そんな経験も無駄ではなく、貴重な体験として百科事典に刻み込まれ、蓄積されたのでした。

このように、関係した地域について徹底的に調べ上げ、実際に訪問したり、時には好奇心に背中を押されて体験したりして、どんな情報もインプットしてしまうのが村山先生でした。

村山先生が生前に関わられた地域連携等における仕事量とその幅の広さは、村山先生の存在感そのもので、たいへん大きかったと改めて感じています。

村山先生と地域という関係は、単に研究者にとっての研究対象というドライな関係ではなく、もっと愛があって深いものだったように思います。村山先生のこれまでの功績は計り知れないもので、とうてい真似のできることではありませんが、今後、私が地域と関わる際には、少しでも先生と地域との関係に近づき、地域から信頼されるように努力して参りたいと思います。

村山先生、これまで本当にありがとうございました。